



Title	<特集>フランスのイメージ論 : 現象学の流れの中で
Author(s)	柿木, 伸之
Citation	形象. 2018, 3, p. 11-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75807
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文

〈特集〉 フランスのイメージ論——現象学の流れのなかで

想像し、描き、象つて意味を創造する人間の美的経験の媒体をなす形象への問いを深めていくうえで、フランスのイメージ（イマージュ）の理論の豊饒さを汲むことは欠かせない。とりわけ現象学の展開のなかで深化されたイメージ論は、身体的経験にイメージの生成の場を見て取りながら、その現象を領域横断的に考察する地平を切り開いてきた。二〇一七年三月一日と二五日の二日にわたり大阪大学文学部美学研究室で開催された第一二回現象論研究会は、そのようなイメージ論を多角的に検討する場となった。本特集は、この研究会の成果を示すものである。フランスにおける現象学的なイメージ論の精華を研究会に伝えてくれた石田圭子、川瀬智之、加國尚志の三氏には、研究会の発起人の一人として心より感謝申し上げる。

本特集「フランスのイメージ論」に寄せられた三氏の論文から見て取られるのは、サルトルのイメージ論との対決が現象学的なイメージ論の展開の契機になっていることである。石田論文は、サルトルの見過ごしたイメージの不透明性によって、そこに不分明な「ある」という出来事の間が開かれることを洞察した初期レヴィナスのイメージ論を辿るとともに、その揺れが、後に彼が芸術作品のうちに他者への回路を見いだすことを可能にしたことを示している。川瀬論文は、知覚と想像を峻別するサルトルを批判しながら展開されるデュフレヌヌのイメージ論を浮き彫りにしている。それは、知覚に想像力がつねに介入するなかで、経験の座として不断に身体が働いていることを超越論的想像力の概念によって明らかにしているのだ。加國論文は、レヴィナスとデュフレヌヌのイメージ論が、これもサルトル批判を起点に、さらにはイコノロジー批判をも含みながら展開されるメルロロポントイのイメージ論に接続されることを示している。決定不可能な「肉」の経験の媒体として沈黙の意味の場をなすイメージを浮かび上がらせるその議論には、現代のイメージ人類学との接点も見いだされるだろう。柿木論文では、ショアの「表象不可能性」という問題に取り組むなかでイメージそのもののうちに裂け目を刻む、現代フランスのイメージ論の展開が辿られている。

〔柿木伸之〕